

横浜市 歴史 博物館

NEWS
38
2015・3

- ◇20周年記念特別講演会 古代に遡る横浜の歴史
- ◇20周年記念特別講演会 日本史の中の横浜 一中世を中心に
- ◇理事長・館長対談「横浜の歴史と博物館のこれから」
- ◇20周年によせて 十年一昔・横浜市歴史博物館追想二題
- ◇平成27年度施設連携展示「横浜三万年の交流」展によせて
- ◇企画展「大おにぎり展」を振り返って
- ◇企画展「鶴見川流域のくらしー生業・水運・信仰・祭礼ー」と三冊の出版物
- ◇おかげさまで20周年 博物館感謝デー
- ◇平成26年度 横浜市指定・登録文化財展
- ◇報告「指定文化財に関する歴史講座を開催して」
- ◇企画展「横浜発掘物語2015」によせて
- ◇くちよいとミュージアムショップたいむ>オリジナル「まが玉キット」
- ◇く知ってますか?>狛犬・獅子・「狛犬」



20周年
講演会

古代に遡る横浜の歴史

さかのぼ

今年で開館二〇周年を迎えた当館の館長として、まずは地域の皆様のご支援に感謝の意を表します。そして、今後も変わらぬご支援をお願いします。さて、今回は「古代に遡る横浜の歴史」と題してお話をさせていただきます。言うまでもなく、横浜の歴史は幕末維新期の開港によって始まるわけではありません。港北エリアには大規模な縄文遺跡がありますし、この歴史博物館の隣地にも弥生時代の遺跡があることから、古くから多くの人が暮らし、歴史を刻んできました。今日は、地域に根ざした横浜市歴史博物館のこれまでの活動の成果を踏まえ、特に七世紀から八世紀に亘って形成された「郡」に焦点を当てつつ、ここにいらしている皆様と一緒に地域史の意味を考えてみたいと思います。

『日本書紀』には六世紀の各地の支配拠点である屯倉（ミヤケ）の設置記事が集中的に載せられており、そのなかには現在の横浜地域に含まれる久良岐、橘樹についての記述が残されています。七世紀後半になると、一定の地域の住民を五十戸ごとにひとまとめにして編成する制度が登場します。奈良県明日香村の石神遺跡から、地方より送られてきた荷物の付札が発掘されたのですが、その木簡のなかに「諸岡五十戸」の文字が墨書されている

ものがありました。諸岡という地名は、現在の横浜市の東部、港北区の東部から鶴見区、神奈川区にかけてのエリアであり、この木簡こそが横浜市に直接関する最古の文字資料である可能性が高いということになります。

やがて五十戸制から里制へ、さらに郷里（小里）制へと変更となり、このいくつかの里を統括する上位に郡が設置されていきます。横浜地域に含まれる古代の郡は、都筑、久良（久良岐）、橘樹、鎌倉、高座の五つ。それらの行政拠点が郡家と言われる役所で、都筑郡家は、現在の青葉区荏田にある長者原遺跡に、橘樹郡家は川崎市高津区に残る千年伊勢山台遺跡に、そして鎌倉郡家は鎌倉市御成町の今小路西遺跡として、高座郡家は茅ヶ崎市下寺尾の西方A遺跡としてその遺構があります。久良郡家に関してはどこにあったかは不明ですが、南区弘明寺付近にあったと想定する試みがあります。

郡家を活動の場とする郡司の職掌は、地域の豪族が徴税や田畑の管理、納税者の把握など、中央集権を目指した国家に代わり、農民をはじめ、労働に従事する人たちの管理、監督をすることになりました。ところが、法制度や政策に即した行政、統治だけでは郡の住民への支配を充分に行うことができず、やがて地域の秩序化を仏教活動や神祭り、あるいはその

一環として行われる饗宴の共同飲食を媒介に、いわばイデオロジカルに補完するようになっていきます。それは、郡家の近接地や周辺に寺院が多くみられることから明らかです。これは古代の郡家を核とする寺院や祭祀の場を含む郡家域が、地域の住民の生産活動、経営、信仰の中心であったことを如実にあらわすものであり、この郡家域の景観は、横浜地域各地に見られたに違いないと推測できるので

集落が変化して消滅に向かいます。郡家の衰退、滅亡と同時に有力豪族の邸宅や新たな集落が登場して、それはまさに古代から中世社会への転換期に入ったことを意味します。しかし、一方で郡や郷、郡司、郷司の名称自体は中世以降も存続していきます。その後も、古代の郡や郷とはまったく意味合いが違いますが、近世にも郡代官、郡奉行があり、近代にも郡長が置かれています。以上のことから考えても、古代に誕生した郡は、地域社会の移り変わりを映し出し、歴史を考え直すキーコンセプトであるといえるのです。



横浜市歴史博物館館長
（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団理事
國學院大学名誉教授）
鈴木靖民（すずき やすたみ）

●一九四一年、北海道に生まれる。一九六六年、國學院大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。日本古代史、東北アジア古代史専門。一九八七年より、國學院大学教授、二〇二二年四月、同大学名誉教授、二〇二二年七月、横浜市歴史博物館館長に就任。

●主な著書 『古代対外関係史の研究』（吉川弘文館、一九八五年）『日本の古代国家形成と東アジア』（吉川弘文館、二〇一二年）『倭国史の展開と東アジア』（岩波書店、二〇二二年）『日本古代の周縁史』（岩波書店、二〇一四年）『相模の古代史』（高志書院、二〇一四年）など。

20周年
講演会

日本史の中の横浜

―中世を中心に―

横浜市ふるさと歴史財団の理事長をお引き受けした直前に病気になるって、二ヶ月間の療養を余儀なくされた時期がありました。時間もあつたので、私が専門としていた中世史とは違った、普段ではできないような研究をしてみようと思ひ、たどり着いたのが「枕草子」だったので。読んでみるとこれが非常に面白くなって、それが文学作品を通じて歴史を見直してみようと思ひ、考えるきっかけとなったのです。

私たち歴史研究家は遺跡や文献などをきちんと検証して積み上げていくものですが、文学作品はあくまで創作ですから、そこには史実とは異なる世界が描かれています。しかし、その時代に生きる人々のものの考え方は、むしろ文学作品の方に反映され、わかりやすく伝えてくれるのではないかと考えるようになりました。「枕草子」を読んでいくうちに、今までの歴史研究では見えないものが次々に発見でき、もともと本腰を入れて取り組んでみようと思つたのです。

その時代のものの方や考え方についても、古代や中世といった大きなくくりで捉えるのはなかなか難しい。例えばお祖父さんの代までは実感できても、それより先になると考え方がまったく違ってくる。とすれば、一〇〇年サイクルで人間の考え方に変化が起きているのではないかと仮説を立て、文献に残されている、も

の考え方に関連する出来事や横浜に関連する事項を整理して並べてみたら、驚くほど綺麗な表ができたのです。

古代の出来事については専門である鈴木館長にお預けするとして、私が専門とする中世から順を追って見ていきましょう。八六六年には藤原良房が摂政となり、天皇を支えるかたちで宮廷政治が確立。それは明治維新まで続いていて、天皇を中心とした身分秩序がこの時期に明確となりました。地方においては、大地震動乱と言われる大地震や災害が頻発し人心が乱れる中、荒れ果てた土地を開墾し、自分のものとする兵(つわもの)が登場。その様子が「今昔物語集」に描かれています。やがて、その兵(つわもの)は中央から派遣された国司に認められるかたちで開発領主となり、武士の身分が生まれ、鎌倉幕府の成立へと繋がっていきます。

その一〇〇年後にあたる九六九年には藤原実頼が摂政となり、いわゆる後期摂政時代を迎えることとなります。この時代には都が安定期を迎え、その様子が様々な文学作品の中に描かれていきます。「蜻蛉日記」は、男女の愛情関係を、日本ではじめてきつちり文章で表した作品と言えるでしょう。そして「枕草子」では、作者が都の風景をリアルに切り取って、見事に描きました。「源氏物語」は主人公に単に事実を描けばいいのではなく、本

当の真実は架空の物語にこそある」と言わせているように、架空であるがゆえに、人生の真実に迫るものでした。この時代の人間観や自然観を後世に伝える金字塔的な作品となったのです。また「更級日記」や「新猿楽記」には地方の風情が克明に描かれています。

横浜と言う地域が登場するのは、さらに一〇〇年後、いわゆる「院政の時代」と呼ばれていた時期のこと。一〇六二年の前九年の役の時期には様々な勢力が現在の横浜に進出し開発が進められていきます。多くの荘園ができて、やがて「氏」から

「家」が形成されるようになりました。その「家」を中心とした武家が、自らを守るために作り上げていったのが鎌倉幕府といえるでしょう。

鎌倉幕府が成立すると横浜の地は、鎌倉の首都圏として機能し、要人たちの別荘が立ち並びます。それがやがて江戸時代になって物流の基地となり、商売はもちろん、新しい学問や技術、思想が集まる場所へと発展していきます。常に横浜は鎌倉時代から以降、経済的にも政治的にも技術的にも首都圏を支える場所だったのです。



五味文彦 (ごみ・ふみひこ)
(公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団理事長)

●一九四六年、山梨に生まれる。東京大学大学院修士課程修了。日本中世史専門。東京大学名誉教授。二〇一三年七月より公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団理事長に就任。

●主な著書 『院政期社会の研究』(山川出版社、一九八四年)『中世のことばと絵』(絵巻は訴える『中公新書』一九九〇年)『徒然草の歴史学』(朝日新聞社「朝日選書」、一九九七年)『書物の中世史』(みすず書房、二〇〇三年)『西行と清盛 時代を拓いた二人』(新潮選書、二〇一一年)『鴨長明伝』(山川出版社、二〇一三年)『枕草子』の歴史学 春は曙の謎を解く『朝日新聞出版「朝日選書」、二〇一四年など。』

理事長・
館長対談

「横浜の歴史と博物館のこれから」

対談 鈴木靖民×五味文彦

鈴木 館長に就任する以前は、講演のお手伝いなどで関わってきました。横浜に移り住み、地域の歴史に興味を持つようになって館長の職をお引き受けしました。二〇年が経過するとうしても設備は古くなっていますが、逆に歴史の研究の方はどんどん広がりを見せています。全面的なリニューアルは難しいにせよ、部分的には手を加えていくべきですね。

五味 そうですね。例えば、古代は古代、中世は中世、近世は近世など区分を固めても、果たしてそれでいいのかと疑問にぶつかるものです。それはあくまで物事を見るためにひとつの材料でしかありません。研究者はどうしても自分の専門の時代にこだわるものですが、ここは博物館ですから、それぞれの時代の専門家の英知を集結して、もっと流動的に表現してもいいのではと思っています。

鈴木 私たちは生粋の博物館人ではなく歴史家なので、もっと広い領域におけるさまざまな研究を深めています。そういった観点から、ここ横浜をキーとして、神奈川の中の横浜、日本の中の横浜、ある

いはアジアの中の横浜など、あらゆる角度から表現するのも良いかと思っています。しかし、五味先生のおっしゃるとおり、設備やスペースに限りがある。

五味 展示はあくまで伝えたいことを表現する手段の一つ。企画展などを含め、もう少し様々な方法を探るべきでしょう。それはこれからの課題のひとつですね。

鈴木 五味先生が理事になった時の対談でも話題になりましたが、やはり博物館に関わる内部の人間がしっかりと、前向きに運営する姿勢で取り組むべきですね。



五味 その通りですね。私は現在、放送大学で教鞭を執っていますが、自分の専門である日本中世史のみならず、生徒が興味関心を持つ事項、それこそ卑弥呼から新島襄まで指導しています。専門領域の研究に没頭するだけでなく、授業や博物館の運営や講演会活動を通じて、多くの人々に歴史の面白さを伝えていく役割の重要性を痛感。そういった意味で今後も、積極的に関わっていききたいものです。

鈴木 そうですね。歴史博物館というのは、市民が歴史に関するTV番組を見たり、本を読んだり、生活や物事を考えたりするうえで必要となるインフラであると考ええます。そして文化財や歴史資料、文化遺産の重要性を訴える場でもあります。社会に向けて文化や歴史を発信する、いわば社会教育、生涯学習の場としていくために、私たちも常にチャレンジしていきたい。市民の方々には、今後も横浜市歴史博物館においてくださり、そして当館を運営する横浜市ふるさと歴史財団へのご支援をお願いしたいと思います。

館長・理事長インタビュー

全国各地の博物館や美術館で利用者の減少が問題となっています。市民にとつ

て身近な存在であるはずの文化施設が、敷居の高い難しい場所となっているのは残念でなりません。そんな状況下にあっても、この横浜歴史博物館が、首都圏でも有数の入場者数を記録し続けているのは大変嬉しいことです。今回の講演会も、申し込み受付開始後すぐに定員一杯となり、改めて市民の歴史に対する関心の高さを実感。皆さんが身近に感じられるような話を意識的に散りばめたつもりです。今後も地域の博物館の役割を意識しながらハードとソフトの両方の改善を進めていきたいと考えます。（鈴木館長）

せつかくの二〇周年ということで、関心の高い市民の方々にその魅力をしっかりと伝えようと、改めて横浜の歴史を勉強して臨みました。地域の歴史は住民の方々にとっての大切なアイデンティティです。ところが生まれ育った子どもたちは、教科書を読んでも現在との関連付けができないことから、地域の歴史に対する関心が薄れてしまっているように思えます。そういった意味でも、地域の博物館が果たすべき役割は大きいと考えています。今後も表現方法に工夫し、若い人も、ご年配も楽しめ、そこから会話が生まれる様なコミュニケーションの場となっていくことを期待しています。

（五味理事長）

20周年
に寄せて

十年一昔

横浜市歴史博物館追想二題

十年一昔と言いますが、開館二〇周年と聞くと十周年の頃を思い出します。私が二〇〇四年春に館長を引き受けて間もない頃でした。

横浜市の歴史関係事業との関係は、東京オリンピックの頃『横浜市史』のメンバーに加えて頂いて以来で、その後、当館を運営する財団にも関係しました。ただ、当時は会議に出ることが仕事でしたので、市民の方に日常的にお目にかかることはありませんでした。

初代館長平野邦雄先生は、残念にも昨秋亡くなりました。開館以来十年近くにわたり、全国でも注目度の高い多くの企画展を主催され、また小学生の体験学習の指導にも自ら当たられていました。

あとをきちんと引き継げるか不安がありました。さらに当時は、市の財政事情の厳しさもあって、数字で実績が問われる時代に差し掛かっていました。質の高い内容に、より多くの市民の方が親しんで下さるように一層の努力が求められていました。

そのために、内部でいろいろと知恵を出して貰い実行することになりましたが、ちようど開館十周年を迎えるにあつて、「博物館まつり」を開催することにしたのです。一月末の二日間無料解放して、いろいろの催しを織り込むにしても、果たしてどれだけの人が来て下さるか、正直な



ところ見当が付きませんでした。いざ蓋を開けてみると、押すな押すなはオーバーとしても、随分多数の方々、たしか二五〇〇人ほどが来館して下さい、当時の文化財課長とともに喜び合ったことは、今でも忘れられない記憶です。

それから年初の「感謝デー」は恒例になりましたが、開館二〇周年を期に、ますます市民の方々に愛される館になることを願っています。

(横浜市歴史博物館前館長 高村 直助)

「横浜二万年の通史」をめざして

一九九四(平成六)年四月に群馬県教育委員会事務局を退職して、横浜市歴史博物館の学芸課長に赴任してきました。それに先だつての面接で、「横浜には開港からの一五〇年の歴史しか無い」と公言する人もいると聞いて「まさか」と思いました。ところが間もなく、それが事実であることを知り戸惑いました。そうした中で、学芸課の面々の「横浜には旧石器時代以来の二万年の歴史がある、その通史を明らかにして広く知ってもらうのが当館の仕事だ」との決意に、その実現がこの博物館での私の使命であることを確信しました。

(現在では三万年前にさかのぼることが明らかにになりました。)そして、優れた専門的資質をもった館員それぞれの発想と活動を重んじるのを、博物館活動の基本にすることを決意しました。これが開館以降の、平野邦雄・高村直助両館長のもとでの活動を特色づけることになったと自負しています。

「歴史博物館」と「ふるさと歴史財団」

もう一つの戸惑いは、私の立場は実際には財団法人横浜市ふるさと歴史財団の学芸課長であつたことです。これは、市が設置した施設を市出捐の団体に管理を委ねる管理委託制度によるものですが、博物館の仕事だけでなく財団の運営に責任



を負う立場でもありました。その相克が露わになったのが、二〇〇六(平成一八)年からの指定管理者制度導入でした。前述した博物館の活動を今度は厳格な枠の中に押し込めるといった、財団としての運営方針を策定する立場になったわけです。財団が管理する各施設との協議、市役所担当部署との折衝など心身共に滅入る日々でしたが、その一方で、指定管理者制度が博物館運営にもたらす功罪の具体的な事例として、広く注目されるようになりました。財団関係者一同の奮闘により全国の博物館への警鐘を鳴らし続けたことで、いささかなりとも社会的貢献を果たせた思いでいます。

(横浜市歴史博物館前学芸課長 前澤 和之)

平成二七年度「ヨコハマ三万年の交流」展によせて 施設連携展示

横浜歴史博物館を管理・運営している（公財）横浜ふるさと歴史財団は、歴史博物館のほか、埋蔵文化財センター・横浜三殿台考古館・横浜市八聖郷土資料館・横浜開港資料館・横浜都市発展記念館・横浜歴史資料室・横浜ユーラシア文化館の計八施設を運営する団体であり、横浜の原始から現代までの歴史を明らかにし、市民にその成果を公開する活動を八施設が一体となっておこなっています。

平成二七年の夏・秋季、財団の諸施設が保有する資料と歴史情報を活用し、これまで培ってきた学校や市民とのつながりを活かしながら、横浜歴史博物館をメイン会場に、財団八施設が連携して、横浜の原始から現代の歴史を紹介する特別展示を開催します。

展示のコンセプトは「交流の場」で、横浜が時代を超えて人々の出会う場所としての役割を果たしてきたことを紹介します。多くの人は、横浜の歴史と聞くとペリー来航や横浜開港を思い浮かべます。確かに横浜を特徴づける言葉に「国際性」があり、横浜の人々は幕末のペリー来航以来、外国の人々とさまざまな形で交流を繰り返してきました。また、横浜は近代を通じて日本最大の貿易港として発展しました。しかし、こうした「交流の場」としての特性は、近代になって始まったものではありません。横浜は考古の時代から

人とモノが行き交う場所であり、古代・中世・近世においても「交流の場」を持ち続けてきたのです。展示では「交流の場」としての横浜の歴史を紹介し、人とモノが行き交う場所を持ち続けたことにより作り出された現在につながる地域のアイデンティティについて考えていきます。

メイン会場となる横浜歴史博物館では「横浜のあゆみーヒト・モノ・マチ」（仮）と題して、横浜の原始から明治時代初年までの歴史をとりあげ、「交流の場」としての横浜の姿をⅠ人々が生きた大地、Ⅱ陸の道を使って、Ⅲ海の道が運んだもの、Ⅳ開かれた都市、の四つの章で展示します。また、横浜ユーラシア文化館が担当する「古地図にみるユーラシアと日本」のコーナーを設置します。以下、各章の概略と中核となる資料を紹介します。

Ⅰ 人々が生きた大地ー変わる横浜の形
考古資料によって明らかにした原始・古代の特徴あるムラ、中世にみられる谷戸部の開発、近世における海岸部の新田開発、近代以降の港湾施設・工業用地としての海岸部の埋立の進展、戦後に飛躍的に造城が進んだ団地や諸施設など、三万年にわたり、「横浜」地域はそれぞれの時代にその形（姿）を変えてきました。ここでは、歴史を支えた人々の「生活の場」の環境・景観の変化の過程を探ります。



石川村絵図(当館蔵) 早瀬川の最上流部に位置する石川村を描く絵図です。

横浜市域最古の資料・北川貝塚遺跡出土礫器(埋蔵文化財センター蔵)、花見山遺跡出土土器(最古級の土器、当館蔵・横浜市指定文化財)などの考古資料、武蔵国鶴見寺尾郷絵図(県立金沢文庫蔵 重要文化財)、石川村絵図(当館蔵)などの絵図類が主たる展示資料となります。

Ⅱ 陸の道を使って

「横浜」地域の歴史は、陸の道によってもたらされるモノ・情報・文化に大きな影響を受けてきました。原始社会におけるムラとムラをつなぐ道の発見やモノの流通、古代における近畿地方との交流・交通、中世の鎌倉を軸に南北方向に展開する鎌倉街道、江戸・京都の東西方向の大動脈であった近世の東海道とその宿場、日本最初の鉄道の開設から展開する都市



初代広重 東海道五拾三次之内 神奈川 台之景(当館蔵)

間・都市内を結ぶ鉄道網・道路網など、「横浜」地域では各時代に特徴ある「陸の道」をみることが出来ます。陸上交通の様相とそれによってもたらされた人・モノ・情報の広がりを探ります。

縄文時代のムラとムラを結ぶ道である古梅谷遺跡出土木道資料(埋蔵文化財センター蔵)、中世の鎌倉街道に関係する豊島範泰着到状(国立公文書館蔵)、東海道宿村大概帳(郵政博物館蔵)、東海道関係浮世絵(当館蔵)などが中心的な資料となります。

III 海の道が運んだもの

―港と廻船、運ばれたモノ―

横浜には中世以来の伝統を持ち、東京湾有数の湊として発展した六浦湊と神奈川湊がありました。鎌倉時代に六浦湊から移入されたと考えられる青磁壺や南宋から輸入された一切経などが残されています。また、市域への移入経路は分かりませんが、茅ヶ崎城址からは中国製の磁器や中国銭が出土し、大陸とのつながりを現在に伝えています。さらに室町時代の神奈川湊の繁栄を伝える古文書が金沢文庫に残されたほか、江戸時代に神奈川湊に物資を運び込んだ内海船と呼ばれる廻船集団の関係資料が大量に愛知県の知多半島に残されています。一方、ペリー来航

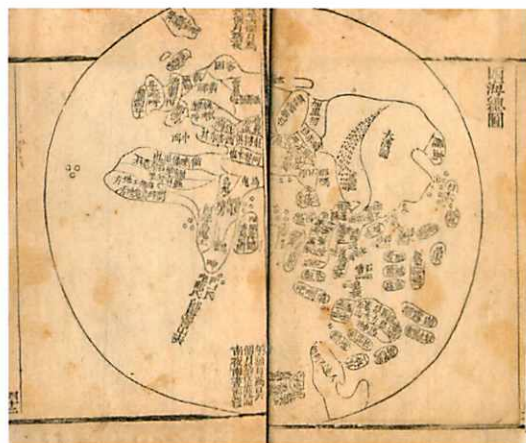
後、海外の文物が横浜に運ばれるようになり、横浜はその窓口として大きな役割を果たすようになりました。ここでは、各時代の海の道の様相とそれによってもたらされた人・モノ・情報の広がりを探ります。

河川交通によって運搬されたと思われる埼玉県生田塚遺跡出土埴輪(鴻巣市教育委員会蔵 重要文化財)と北門1号墳出土埴輪(当館蔵、横浜市指定文化財)、中世における交易を示す「武蔵国神奈河品川両湊帆別銭納帳」(県立金沢文庫蔵 重要文化財)、海外からの影響を示す木造釈迦如来立像(称名寺蔵・真福寺蔵 重要文化財)、ペリーがもたらしたモリス電信機(郵政博物館蔵 重要文化財)など、なかなか目にするのができない資料が展覧される予定です。

IV 開かれた都市―六浦・神奈川・横浜

港湾施設の後背地には港を支える町が形成されました。鎌倉時代には六浦湊の後背地に大きな寺院があり、寺院は文化や経済の拠点になりました。江戸時代の神奈川湊の後背地には宿場が作られ、宿場は地域経済の拠点や文化交流の場所として大きな役割を果たしました。横浜開港後は現在の中区地域に外国人居留地が設置され、横浜は国際都市として発展を続けました。「交流」の場として展開した、六浦・神奈川・横浜の都市様相をみていきます。神奈川駅中図会(当館蔵)、御開港横浜之図、御開港横浜真景(横浜開港資料館蔵)など各都市に関わる資料が展示されます。

また「古地図にみるユーラシアと日本」のコーナーでは、横浜ユーラシア文化館



四海図 『海国聞見録』所収(横浜ユーラシア文化館蔵)

所蔵の古地図を軸に、ユーラシア世界の様相と日本の位置をさぐります。ユーラシア文化館所蔵の四海図、華夷図、世界図と共に、日本図(仁和寺蔵 重要文化財)などの展示も予定しています。

歴史博物館以外の諸施設の展示は次のとおりです。

横浜開港資料館「ハマを駆ける―クルマが広げた人の交流 明治・大正編」、横浜都市発展記念館「ハマを駆ける―クルマが広げた人の交流 昭和編」―横浜が陸上交通の近代化に果たした役割や車(人力車・馬車・自転車・自動車など)を利用した人々の交流のあり方、さらには自動車普及による生活スタイルの変化などを紹介します。

横浜市三殿台考古館「弥生トレード―横浜の遺跡から見る弥生時代の交流・交易」―三殿台遺跡からの出土品をふまえ、石器・金属器・玉類などに関する弥生時代の人々の交流・交易の一端を紹介します。

埋蔵文化財センター「よみがえる中世称名寺―赤橋の橋脚」―称名寺で発見された鎌倉時代末の橋脚を復元的に展覧すると共に、かわらけ・陶磁器などの出土遺物を紹介します。

八聖殿郷土資料館「絹の道―原三溪と富岡製糸場」―生糸生産地と横浜との交流の歴史をパネルで紹介いたします。

市史資料室「戦争と戦後をめぐる日本とアメリカ」―戦中・戦後の日本とアメリカの関係を資料とパネルで紹介いたします。

また、全体に関連した講演会や各種関連事業も計画しています。この機会に歴史博物館のみならず、各施設の展示も合わせてご覧いただき、「横浜」の「交流の場」としての歴史的特性と魅力を感じ取っていただければと思います。

(平野 卓治)

表紙の写真は、花見山遺跡(都筑区)から出土した最古級の土器(当館蔵)、海の交通と陸の交通の交差点として栄えた神奈川を描く「初代広重 五十三次名所図会 四 神奈川 台の茶屋海上みはらし」(当館蔵)、安政元年(一八五四)二月にペリーが横浜に上陸した様子を描いたハイネの画(『日本遠征画集』所収、横浜開港資料館蔵)。

■展示会期 平成二十七年七月一八日(土)〜九月三日(水・祝) 各施設同時開催
■観覧料 有料施設である歴博・開港・都発については、三館を観覧できる共通入館券を発行し、大人二〇〇円です。



袴姿の人物埴輪
北門1号墳(緑区)出土(当館蔵)
生田塚遺跡(鴻巣市)で生産されたものとみられています。

企画展

「大おにぎり展」を振り返って

二〇一四年秋の企画展「大おにぎり展」―出土資料からみた穀物の歴史―では、講演会や遺跡散歩などの通常のラインナップ以外にさまざまな関連行事を企画しました。

も作ったこともあって時間的にかなりハードでしたが、ほとんどのの方が作品を完成させることができました。横浜地域の出土資料に基づいたもので、機会があればまたやってみたい体験学習です。

ニティ主催）。登呂遺跡での調理実験と博物館の見学に加え、静岡県埋蔵文化財センターでは今回の展示で借用できなかった炭化米塊の見学もできました。通常通りのフロアレクチャーに加えて、親子向けを三回実施しました。おにぎりのかぶりものやポケットからいろいろ取り出すなど、子どもが飽きないような工夫をしてみました。

てほしかったのですが、さすがにそこまでは無理でした。また、チラシをおにぎり形に折ると割引になるサービスは、期待以上に多くのお客様に楽しんでいただけたようです。

なお前号で紹介した博物館屋上の歴史博田んぼですが、展示開始直後の一〇月一七日に無事に刈入れを済ませたことをご報告しておきます。

(高橋 健)



実験！古代のご飯を食べよう



古墳時代のお弁当箱を作ろう

遺跡公園でおこなった「実験！古代のご飯を食べよう」では、弥生時代と古墳時代の復元土器で調理したご飯を食べ比べました。このイベントのために、横浜縄文土器作りの会に依頼して復元土器を製作してもらって春から繰り返し調理実験を行い、最終的には湯取り法（弥生時代の甕）と蒸し加熱法（古墳時代の甕・甗）での調理も上手にできました。米の調理実験は今後も野外イベントの時に続けていきたいと考えています。

「土器を食べちゃえ！」は、お菓子作り考古学者ヤマミラさんが作るドッキ（土器片そっくりのクッキー）を試食するもので、クオリティの高さがツイッター等で話題を呼びました。先日の博物館感謝デーでさっそく第二弾を行いました。大人気で十分もしない間に整理券がなくなっていました。

「土器の圧痕レプリカ体験」は展示内容と関連した体験で、参加者からは展示の理解が深まった、毎日やってほしいとの声もいただきました。

バスツアー「登呂遺跡でおにぎりを食べる旅」も実施しました（株）臨港コミュ



土器を食べちゃえ！



土器の圧痕レプリカ体験



親子向けフロアレクチャー



登呂遺跡でおにぎりを食べる旅

関連行事とはいえませんが、展示を見ておなかのすいたというお客様のために、「れきはく周辺（非公式）おにぎりMAP」を作成・配布しました。コンビニから居酒屋まで網羅して充実したものに、なったと自負しておりますが、お店の集客効果があったかどうかはわかりません。相当マニアックなキャラまで集めた「全国おにぎり系キャラMAP」も作成しました。できれば着ぐるみに博物館に来



チラシを折ると割引サービス



歴博田んぼの刈り取り



れきはく周辺おにぎりMAP



全国おにぎり系キャラMAP

企画展

「鶴見川流域のくらし」

「生業・水運・信仰・祭礼」と三冊の出版物

博物館では、三月一五日(日)まで「鶴見川流域のくらし——生業・水運・信仰・祭礼」と題した企画展を開催しました。テーマは横浜地域北部を流れる鶴見川です。展示の内容は、平成二十二年(二〇〇九)年から活動を始めた「民俗に親しむ会」の鶴見川源流から河口に至るまでのフィールドワークの成果を反映させるとともに、担当した自分が鶴見川について興味を持ったことがらも取り入れました。

博物館の企画展は、会期が終了すると、資料が展示されていた内容とその空間を二度と見ることはできなくなるとい、はかない運命を持っています。今回も既に展示は終了しましたが、その内容を反映するかたちで出版物を刊行することができました。(写真1)

今回三冊の出版物を刊行しましたが、その一冊に『歩いた・見た・調べた 横浜市歴史博物館民俗に親しむ会 鶴見川流域フィールドワーク調査報告』という報告書



写真1 今回刊行した出版物
右上『歩いた・見た・調べた 横浜市歴史博物館民俗に親しむ会 鶴見川流域フィールドワーク調査報告』、左上『鶴見川流域のくらし——生業・水運・信仰』、下『鶴見川流域祭礼犬百態』



写真2 写真展「鶴見川流域祭礼犬百態」の展示風景 展示は終了しましたが、写真集で犬それぞれ表情やその違いをご覧いただけます。

があります。これは「民俗に親しむ会」の会員が今回の展示にあたり、フィールドワークで得た興味や関心をまとめたものです。企画展のチラシでは、その成果を展示に取り入れる旨を記しましたが、結果的にそれぞれの内容が深く、また多岐にわたったため、展示ではその一端を紹介するに留まりました。報告書は、Ⅰ鶴見川と人々のくらし、Ⅱ鶴見川流域の石造物、Ⅲ祭礼と信仰、Ⅳ鶴見川流域と近現代の四章で、それぞれ二本から四本のレポートが掲載され、全部で一五四ページのボリュームです。ご興味ある方は、内容の濃いレポートをぜひご覧いただきたいと思っています。

もう一冊に『鶴見川流域祭礼犬百態』と題した写真集があります。「民俗に親しむ会」の会員がレポートのテーマに犬犬を選びました。そのことがきっかけで、企画展の関連事業として写真展「鶴見川流域祭礼犬百態」を開催することにし、写真を公募したところ、四一名の方から一〇〇点

以上のご応募をいただきました。写真集はご応募いただいた写真を複写して刊行したものです。実際の写真展は、企画展示室の二面の展示壁面を使い、長さ約十六メートルに渡って一三対の犬犬写真を展示しましたが、その迫力はかなりのものでした。(写真2)

また犬犬の一つ一つが豊かな表情を持ち、凛とした厳しいものから、可愛いもの、また面白いと思えるものまである多様な姿をじっくりご覧いただくことができました。写真展は終了しましたが、この写真集によってその内容を現在でも見ていただくことができるようになりました。

最後の一冊は『鶴見川流域のくらし——生業・水運・信仰』というタイトルの展示図録です。鶴見川が描かれた絵図や流域の生業に多くのページを費やし、結果として展示タイトルにあつた「祭礼」までを紹介することができませんでしたが、けれども鶴見川流域の特徴である天然製氷や素麺の製造、また水運や和船を紹介したことは意味あることではないかと考えています。

今回の展示と出版物の刊行にあたっては多くの方々や機関にご協力を賜りました。資料の利用についてご快諾をいただいた方々や機関、また犬犬の写真をご応募いただいた方々、そして「民俗に親しむ会」会員諸氏に、心よりお礼を申し上げます。

(刈田 均)

おかげさまで二〇周年 博物館感謝デー

(写真) 奈良時代の女官の衣装で演奏する渡邊まやさん



当館は平成七年(一九九五)一月三一日にオープンしました。毎年恒例の「博物館感謝デー」、今年の開催日は開館二〇周年を迎えるまさにその日、一月三一日と二月一日となりました。そこで今回は、新成人の方々の協力をいただき一緒に二〇歳を祝おうというコンセプトのイベントを企画しました。

三日には都筑区出身の新成人で、すでにコンクールで受賞歴もある渡邊まやさんによるマリンバの演奏。当日のステージでは、奈良時代の女官の衣装で登場してくださいました。

一日には同じく横浜出身の新成人で、若くして日本のトッププロとして活躍中の大道芸人、Performer S.Y.O-Iさんがその技を披露。さらに例年は博物館のスタッフが着ている時代衣装を、一般公募で二〇歳の方に着ていただく企画も行いました。

おかげさまで、この二日間感謝デー史上最多となる合計六〇〇〇人を超えるお客様にお越しいただきました。ひとつの節目を迎え、新たな気持ちでスタッフ一同、努力してまいります。

(可知 博道)

平成二六年度横浜市指定・登録文化財展

横浜市では、文化財の保存・活用のため、文化財の指定・登録を行っています。また、市民の方々に指定・登録事業及び文化財への理解と関心を深めてもらうことを目的に、文化財の公開を行ってき

「展」も開かれ、親子連れなど多くの観覧者を得ました。

(平野 卓治)



平成二六年度(土)から平成二七年一月一二日(月・祝)まで、横浜市が平成二六年度に指定した文化財を中心に紹介する展覧会を開催しました。今回は、平成二六年度に指定された、光明寺(港南区)所有の「木像観音菩薩立像」(彫刻)、上行寺(金沢区)所有の「曼荼羅本尊」(書跡・典籍)、「板曼荼羅」(歴史資料)、池辺町八所(戸自治会)の「廻り地蔵」(無形民俗)と共に、薬王寺(磯子区)所有の「木造薬師如来立像」(彫刻、平成一八年度指定)、新羽町三谷廻り地蔵講の「廻り地蔵」(無形民俗、平成二五年度指定)の計六件を展覧しました。新指定の文化財の展覧は、平成二二年度以来であり、彫刻から無形民俗まで多様な種類の文化財が並び、観覧者の目を楽していました。



右:指定登録文化財展のチラシ
上:八所谷戸自治会の「廻り地蔵」展示状況

報告

「指定文化財に関する歴史講座を開催して」

当館では毎冬の時期に「横浜市指定・登録文化財展」を開催しております。それにあわせて本年度はじめて「指定文化財にみる横浜の中世・民俗」と題して歴史講座を開催いたしました。

二月七日(日)には中世史講座「指定文化財にみる横浜の中世 上原家文書を読む」として当館学芸員の阿諏訪青美が、横浜市指定文化財となっている中世の古文書のうち、青葉区市が尾の上原家が所有し当館に寄託されている「上原家文書」をテーマに開催しました。上原家文書は平成一二年に横浜市指定文化財に指定されたもので、本講座は資料を通して窺い知ることが出来る北条氏と上原家の関係や戸部郷(西区南部一帯)・市郷(青葉区南東部)の地域の様子等についての解説となりました。

また、二月二一日(日)には「指定文化財にみる横浜の民俗「廻り地蔵」の習俗」横浜市指定無形民俗文化財を中心に「として当館学芸員の羽毛田が担当して民俗講座を開催しました。「廻り地蔵」は、おもに子どもの病気除けや無事健康に成長することを祈願するためにおこなわれる民俗行事ですが、横浜市では平成二五年度に「鶴見川流域の廻り地蔵」三件、「下飯田の廻り地蔵」一件が無形民俗文化財の指

定となり、平成二六年には「鶴見川流域の廻り地蔵」一件が追加されました。これを記念して本講座では地域の指定の「廻り地蔵」や関東近県の事例などの紹介と解説をおこないました。

はじめて「横浜市指定・登録文化財」をキーワードに、展覧会とリンクするかわちで講座を開催いたしました。横浜市は昭和六二年に横浜市文化財保護条例を制定し、地域の歴史や文化、自然を理解するうえで重要な価値をもつ様々な文化財、史跡等を指定・登録し、その保存・活用をおこなっており、平成二六年度までの指定文化財は一五六件、地域文化財としての登録は九三件を数えます。参加者からは「好評をいただいた今回の講座ですが、今後もこのようなかたちで有機的に普及啓発事業を展開していきたいと考えております。」(羽毛田智幸)



講座当日の配付資料は図書閲覧室で閲覧・コピー(有料)することができます

企画展

「横浜発掘物語二〇一五」によせて

皆さんは自分たちの足下、地面の中には何かがあるか、考えたことはありませんか？映画や漫画、ゲームなどで語られる地面の中は、毘だらけの建物が残っている人々を待ち受けている、空洞になっているなど、これから始まる冒険の舞台になっていることがありません。目に見えない地面の中だからこそ、想像力が働く余地が多いでしょう。

実際に地面を掘ってみても、残念ながら冒険の旅に出ることはできませんが、かつてその場所で生活していた人々の痕跡が見つかることがあります。これらは

考古資料といえます。考古資料は土器や石器などの移動できる物を遺物、堅穴住居跡など移動することが難しい物を遺構・遺物と遺構の両方からどちらか一方が見つかる範囲のことを遺跡と言います。そして考古資料から、いつ・どこで・だれが・何を・なぜ・どのように使用したのか考える学問のことを考古学といえます。考古学という、恐竜の化石を思い浮かべる人もいると思いますが、あくまで人がいた時代を対象としています。考古資料を手に入れるために、むやみやたらに地面を掘ることはありません。計画をして、少しずつ掘り下げながら考古資料を

探し、見つかったら記録をします。このような方法を発掘調査といえます。横浜市内では、発掘調査などの成果によって約三〇〇〇年前の旧石器時代から近代に至るまで、多くの遺跡が約二三〇〇カ所見つかっています。市内の発掘調査によって発見された考古資料は、横浜の歴史を語る共有の財産・文化財として、横浜市歴史博物館や埋蔵文化財センターなど各所に収蔵されています。

企画展「横浜発掘物語二〇一五」では、発掘調査の流れを紹介するとともに、横浜市歴史博物館や埋蔵文化財センターなどで所蔵している、貴重な文化財である旧石器時代から戦後までの考古資料の展示を中心にしています。また、市内に残る遺跡の中で、いくつかはその場に保存されており、そのうち代表的なものを紹介し、文化財の保護についてもご説明する予定です。皆さんが知らないだけで、実は家の近くに保存された遺跡があるかもしれません。

展示室の外では関連書道展「大昔を書いちゃった!!」を開催します。普通の書道ではまず書くことが無い、ユニークな書がお出迎えます。

今回の展示をとおして、一人でも多くの方が発掘調査や考古学、文化財の保護に関心を持っていただければと考えています。

(橋口 豊)

弥生時代の土器



大塚遺跡全景空撮



保存された遺跡 市ヶ尾横穴墓群



ちよいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

オリジナル「まが玉キット」
リニューアルします！

数あるオリジナル工作キットの中でも安定した人気を誇る「まが玉キット」と「まが玉キット・棒ヤスリ付」が、4月よりリニューアルします。

今までは紙ヤスリが2枚入っていましたが、リニューアル後は3枚になり、より綺麗な仕上げが可能となります。仕上げの工程で目の細かい水ヤスリを使い、水の中で磨くのがコツとなります。

新価格は「まが玉キット」450円、「まが玉キット・棒ヤスリ付」680円(ともに税込・み予定価格)。パッケージ自体の変更はありません。

キットに入っている青田石は、落としたり強い衝撃で割れたりしやすいですが、削ってみると意外と時間がかかるので根気よく形を整えてください。

きつとピカピカで綺麗に仕上がった「まが玉」に愛着が湧くことでしょう。

その他にもたくさんのおりじなキット、グッズを販売していますので、ぜひミュージアムショップへのご来店お待ちしております。



パッケージの変更はありません
(写真は変更前のキット)

?????? 知ってますか ???????

狛犬・獅子・「狛犬」

狛犬は、高麗犬とも記し、現代では神社や寺院の境内や参道に奉納された獅子形の置物を指しています。元々は中国から渡来した空想上の動物で、日本では魔除けや厄災除けのために、阿形の獅子と、吽形の「狛犬」の二種一対で、神社や寺院の参道に奉納されるようになりました。ちなみに「狛犬」には角があります。例えば、鶴見区江ヶ崎町の八幡神社に天明8年(1788)、鶴見区矢向の日枝神社には文化2年(1805)、港北区新羽町の杉山神社に文化12年(1815)の狛犬が奉納されていますが、これらは拝殿に向かって右に阿形の獅子、左に角のある吽形の「狛犬」が配されています。



日枝神社(鶴見区矢向)の文化二年(一八〇五)の「狛犬」。拝殿に向かって左側にあり、頭上に角が見えています。

その後、「狛犬」は不思議と奉納されなくなり、右に阿形、左に吽形の獅子が一対で奉納されるようになります。私たちが普段見ている狛犬は多くが左右の獅子一対であり、狛犬ではありません。

横浜地域の狛犬は、ブロンズやコンクリート製もありますが、ほとんどが石造物です。神社によって、時代によって表情や姿勢が異なり、正面を向いてしゃがんでいるものもあれば、子獅子と戯れているものもあり、比較してみると興味が湧いてきます。(刈田 均)

これからの催しもの

- ◎4月 4日(土) ~ 5月24日(日)
企画展「横浜発掘物語2015一君も今日から考古学者!」
- ◎6月 6日(土) ~ 7月 5日(日)
企画展「古代の仏教一博物館収集資料を中心に」(仮)
- ◎7月18日(土) ~ 9月23日(水・祝)
特別展「わがまち横浜再発見『ヨコハマ3万年の交流』横浜のあゆみ一ヒト・モノ・マチ」(仮)

編集後記

おかげさまで当館も20周年を迎えました。この夏、当館も管理している(公財)横浜市ふるさと歴史財団の8施設が連携して、横浜30000年の交流の歴史を再現します。関内にある横浜開港資料館、横浜都市発展記念館などでも展示を行いますので、読者の皆様も各施設を巡って交流を体験いただければ幸いです。(H)

横浜市歴史博物館 日誌

二〇一四年十月一日 ~ 二〇一五年三月三十一日

- 10月11日 企画展「大おにぎり展ー出土資料からみた穀物の歴史ー」(11月24日まで)
企画展関連フロアレクチャー
第3回都筑・遺跡公園・民家園アート月間(12月6日まで)
- 10月11・12日 体験学習「縄文館を粘土で作ろう」
- 10月13日 企画展関連「親子向けフロアレクチャー」
企画展関連「実験! 古代のご飯を食べよう」
- 10月18日 企画展関連フロアレクチャー
- 10月22日 企画展関連通観歩③「横浜市南部のおにぎり関連通観歩を歩く」
ふるさと横浜探検③「地名寺周辺の史跡を訪ねて」
- 10月25日 企画展関連フロアレクチャー
ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【原始!】」
ラストサタデープログラム「おもしろいぞ! 紙芝居」
- 10月26日 企画展関連「古墳時代のお弁当箱を作ろう」
- 11月1日 企画展関連フロアレクチャー
- 11月2日 企画展関連「親子向けフロアレクチャー」
企画展関連「実験! 古代のご飯を食べよう」
体験学習「縄文館を粘土で作ろう」野焼き
- 11月3日 企画展関連講演会「おにぎりの考古学」
企画展関連「土器の位置レプリカ体験」
企画展関連「土器を食べちゃえ!」
- 11月5日 企画展関連通観歩③「横浜市北部のおにぎり関連通観歩を歩く」
- 11月8日 企画展関連フロアレクチャー
- 11月15日 企画展関連フロアレクチャー
- 11月16日 企画展関連「古墳時代のお弁当箱を作ろう」
- 11月22日 企画展関連フロアレクチャー
体験学習「そうりょう編み」
- 11月23日 企画展関連「親子向けフロアレクチャー」
企画展関連「実験! 古代のご飯を食べよう」
- 11月28日 体験学習ミニ展示「ちよとを昔を探してみよう」(4月2日まで)
- 11月29日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【原始II】」
ラストサタデープログラム「おもしろいぞ! 紙芝居」
- 12月6日 企画展「平成26年度横浜指定・登録文化財展」/横浜の遺跡 古墳の出現ー横浜の集落遺跡と前期古墳(11月12日まで)
中世史講座「指定文化財に見る横浜の中世 上原家文書を読む」
体験学習「和風(わだこ)」
- 12月7日 第27回エントランスホールコンサート「ヴィオラとアイリッシュハープが奏でる名曲の午後」
- 12月13・14日 企画展関連フロアレクチャー
- 12月14日 民俗講座「指定文化財に見る横浜の民俗(寄り地蔵)の習俗ー横浜市指定民俗文化財を中心にー」
- 12月20日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【古代】」
ラストサタデープログラム「おもしろいぞ! 紙芝居」
- 12月21日 収蔵資料ミニ展示「近年の寄贈民俗資料からー古写真・映像・掛軸ー」(1月18日まで)
- 12月27日 企画展関連講演会「ヤマタイ(国時代の東日本ー古墳出現期のかなわ」
企画展関連フロアレクチャー
- 1月10日 近世史講座「資料からみる幕末横浜の村々」
- 1月11日 古代史講座「横浜の古を考へるー文字資料を通じてー」
収蔵資料ミニ展示解説
ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【中世】」
ラストサタデープログラム「おもしろいぞ! 紙芝居」
- 1月31日 2階ロビーミニ展示「横浜縄文土器作りの食作品展」(2月1日まで)
企画展「鶴見川流域のくらしー水運・信仰・祭礼ー」(3月15日まで)
企画展関連写真展「鶴見川流域のくらし」(3月15日まで)
開館20周年記念特別講演会「鶴見川流域のくらしと横浜の歴史」/五味文彦「日本史の中の流れー中世を中心に」/理事 館長 対談「横浜の歴史と博物館のこれから」
博物館開館20周年感謝デー
- 1月31日・2月1日 企画展関連市場神代祭神楽「天孫降臨」
- 2月1日 企画展関連鶴見川流域フィールドワーク①「町田市小山田地区周辺」
- 2月4日 収蔵資料ミニ展示「佐久間山の書簡ー象山展未公開資料ー」(2月15日まで)
- 2月7日 実験考古学講座「縄文土器づくり」(3月21日まで全4回)
- 2月8日 企画展関連ギャラリートーク
- 2月11日 企画展関連鶴見川流域フィールドワーク②「町田市忠生・園部町周辺」※相模原市立博物館民俗調査会連携フィールドワーク
- 2月14・15日 体験学習「紙すき」
- 2月15日 収蔵資料ミニ展示解説
- 2月22日 企画展関連ギャラリートーク
体験学習「小さな縄文土器」
- 2月25日 企画展関連鶴見川流域フィールドワーク③「町田市三輪町・川崎市麻生区・横浜市青葉区(恵通(おんまわし)公園調布池見学)」
- 2月28日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【近世】」
ラストサタデープログラム「おもしろいぞ! 紙芝居」
- 3月4日 企画展関連鶴見川流域フィールドワーク④「横浜市港北区周辺(鶴見川流域センター見学)」
- 3月7日 企画展関連講演会「鶴見川流域のくらしと横浜の現代・未来史」
収蔵資料ミニ展示「横浜の板紙」(3月15日まで)
- 3月8日 企画展関連ギャラリートーク
- 3月11日 企画展関連鶴見川流域フィールドワーク⑤「横浜市鶴見区周辺」
- 3月14日 企画展関連「親子や家族で楽しむ歴史とくらしフィールドワーク」
- 3月15日 収蔵資料ミニ展示解説
- 3月18日 「バスターー後北条氏の中世城郭シリーズ」[沼津市周辺の中世城郭を訪ねて]
- 3月21日 体験学習「小さな縄文土器」実験考古学講座「縄文土器づくり」野焼き
- 3月22日 2階ロビーミニ展示「私たちがつくった縄文土器展」(3月29日まで)
- 3月28日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【近代】」
ラストサタデープログラム「おもしろいぞ! 紙芝居」

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)
大塚遺跡を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡
月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上、1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

- ◆特別展・企画展の観覧料は別に定めます。
- ◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。
- ◆「演ともカード」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図 横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分

(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(1時間200円)

●インターネットホームページ <http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

●@yokorekihaku

